

## 戊戌政變の回憶

張元濟述  
小野信爾譯

前商務印書館社長張元濟（菊生）は戊戌變法關係者中唯一の生存者である。以下に譯出したのは一九四九年新中國成立前、政治協商會議に参加のため北上した張氏（當時八三歳）から、北京大學の研究者が記録した聽書であり、新建設一卷三期、新華月報創刊號に發表された。多少の記憶違いもあるが通藝學堂、變法と李鴻章の行動等について、興味ある事實が語られており、資料叢刊「戊戌變法」第四冊の資料解題にも貴重なものとして取上げられている。登載雜誌が現在日本では殆ど見られないため、特にここに譯出し、問題個所に簡単な註を附して紹介することとする。なお原本は立命館大學經濟學部武藤守一教授が昨年北京で購われた新華月報に據つた。ここに誌して同教授の御厚意に感謝したい。

五十餘年前、朝鮮の事件によつて中國と日本は開戦した。すなわち甲午中日戦争である。

その結果我々は敗北し、人々は夢から醒めて改革の必要を痛感し

たのであつた。丙申の年（一八九六年、光緒二十二年）前後、我々一部の同官はいつも陶然亭に會して朝政を論議したが、参加者は全部で數十人に上つた。その時は會の名前もなく、ただ數日毎に集つて論議していただけであつた。一緒に集つた人々には、今覺えているところで、文廷式（瑾妃、珍妃の先生、當時侍講學士）、黃紹箕、陳熾、汪大燮、徐世昌、沈曾植（刑部の官員）、沈曾桐（翰林院編修）等があり、康有爲はその頃まだ北京に居なかつた。

其後康有爲が北京に来て、戊戌の年（一八九八年、光緒二十四年）三月、保國會を組織し、順治門大街湖廣會館で開會した。参加者は非常に多く、其中には京官もいたし、京官でないものもいた。

この時、上述の同僚と梁啓超等は北京で強學會を創設した。場所<sup>(1)</sup>は前孫公園で、汪大燮と梁啓超が共に會中におり、その時「強學報」<sup>(2)</sup>を主編し、木刻活字で印刷出版して毎日一冊を發行していたのを記憶している。後「強學會」は私の向いに住んでいた御史楊崇伊から奏參され、遂に閉鎖（查封）された。

當時、私は總理各國事務衙門で章京の職にあつたが、この衙門の主管部門は非常に廣く、學堂、鐵道、礦山、造船、練兵、外交等を包括していた。主管官は總理王大臣で全部で八、九人おり、恭親王奕訢・慶親王奕劻や李鴻章等は皆その頃の領袖であつた。光緒帝は新書を好んで讀み、いつも書付(條子)を總理衙門にやつて本を求められ、全て私の手でそれを取扱つていた。その頃、黃遵憲が「日本國志」を著し、光緒帝は名指しでこの本を求めて來たが、それも私が取寄せて進呈したものだつた。帝はまた人の上書建白を好んだ。外部からの上書はすべて先ず總理衙門に送り、その上で轉呈することになつてしたが、當時、外から送つて來る各種の章奏は殆どが奇々怪々な内容のものばかりであつた。

戊戌の年、四月二十八日、光緒帝は康有爲と私を召見された。その時、私はまだ總理衙門に奉職中で、召見を蒙つたのは當時の翰林院侍讀學士徐致靖が上摺して私等を保舉してくれたからであつた。

二十八日、まだ明けやらぬうちに私は西苑(今の中南海)門外に行き、朝房に坐つて待つた。その日、朝房に伺候したものは五人、榮祿、二人の外省の知府新任者、康有爲と私とであつた。榮祿は見榮たつぷりで非常に尊大にかまえていた。康有爲は朝房で長い間彼と大いに變法を談じたが、彼はただ唯々諾々、意見をさしはさまなかつた。召見の時、二人の新知府が先ず順次進謁した後、太監は康有爲を喚んで進謁させた。十五分位で康先生が引退つて來、私は四番目に勤政殿の傍の小さな部屋の中で召見をうけた。(この殿は今ももう全く様子が變つて見出せない。)光緒帝は衣冠をつけて、黃の卓帷を置いた書卓を前に上手に座し、私は進んで卓子の傍に跪つ

いた。その時、部屋には第三者はおらず、ただ一君一臣が相對するだけであつた。太監はドアの外に留まり、内に入ることを許されなかつたのである。

當時、滇越邊境で國境をめぐる紛争が起つていたので、帝は私に向つて云つた。「我々がもし人を雲南に派遣したら二ヶ月かかつてやつと行けるが、外國人は十日もあれば到達出来る。我が中國は道路も通ぜず、一切が遅れていて何事も外國に及ばない。どうして他とうまく交渉出來よう。」私が「陛下が現在政務にいそしまれ、極力改革を期しておられるのも、國家が日に日に進歩するよう希望されてのことでございます。」と答えると帝はそれを聽いて歎息をつき「だが彼等は皆不贊成だよ。」と云つたのである。私はその言葉を聞いて帝が非常に氣の毒になり、もはや何にも云わなかつた。光緒帝はそこで私共のやつていた通藝學堂に話題を移した。

その頃、私は北京で友人達と通藝學堂を主宰していたのである。(胡思敬著「戊戌履霜錄」に上海で開設したとしているのは誤り)英語と數學とを教え、學生は四、五十人、招いた二人の教官は一人は同文館の學生、今一人は嚴復の甥、嚴君潛であつた。「通藝」の二字は嚴復の命名にかかり、宣武門内の象坊橋に大きな建物を借りて校舍に充てていた。(學堂創立者は陳昭常(後の吉林巡撫)、張蔭棠(後の西藏大臣)、部曹の何漢翔、曾習經、周汝鈞——以上五人は廣東出身——夏偕復(工部主事、浙江出身、後の駐米公使)と私とであつた。經費の出處がなかつたので私共發起人が總理衙門の各大臣に呈文を提出し、彼等の提倡を請うたが、張蔭桓が最も熱心で同僚數人を誘つて連名の手紙を出し、各省督撫から寄附を募つてくれた。全部で數千元が集り、その中には張之洞、王文韶の寄附もあつ

た。光緒帝は外部の事情に非常にくわしく、私共が學堂を主宰していることも知っていたのである。その日、帝に學堂の様子を尋ねられて、學生數や教授科目について答えると、帝は私を「學生によく勉強させれば將來國家のために有用であらう。」と勵ましてくれた。また總理衙門に關する質問もあつたが、何であつたか記憶していない。そこで帝は私を引退らせた。帝の語氣は頗る温和であつたが、容貌には剛健さが缺けていたようである。退出の時、私は進調する榮祿と出遭つた。

その日、光緒帝は康有爲を總理衙門章京に任じた。もともと彼を總理衙門大臣にしたかつたのだが、榮祿に反對されたのだという。但し、これは傳聞なので事實かどうか保證出来ない。

日清戰爭後、中國は朝鮮の獨立を承認して公使を派遣することとなり、國書を總理衙門が起草した。草稿では大清國大皇帝を一格高く朝鮮國國王を一格下げて書いており、光緒帝が傍に「我々がすでに朝鮮の獨立を承認した以上、一格下げて書くべきでない」と硃批して總理衙門大臣の思想の腐敗を叱責したこともあつた。

或日、私は總理衙門事務廳に行つて積み上げた公文書の中に一本の電報を發見した。署名はロシアのニコライ二世で光緒帝に宛てたものである。何故、公使から轉呈しなかつたのか不思議に思えたが、規則ではこの様な電報は即刻帝にとどけるべきものである。見ると事務廳で二日も放置されている。私が幫總辦瑞良（旗人）に知らせると急遽馬で馳せつけ、大慌てで同文館學生に翻譯させ進呈した。當時の政治の腐敗ぶりが知られるであらう。その頃、總理衙門章京の中で、些かでも歐文に通じたのは私だけだつたのである。また衙門の中の戸棚には外國と締結した條約がならべてあつたが、そんな

重要文書が保存に注意されず、誰でも勝手に開き見ることが出来た。こんな腐敗した國家がどうして亡ばぬわけがあらうか。

戊戌の年、六、七月頃、御史宋伯魯が入股を廢し學堂を開くことを奏請して裁可された。當時、守舊派の新政反對の空氣はすでに濃く、私は康有爲に適度に止めて過激にならぬよう勸告し、同時に機をみて南方に行つて學堂を開設し、將來のために新しい人材を養成するとともに、反對者の壓力を緩和すべきであると勧めたのである。だが、康は「突進あるのみ」と云つて聽き入れなかつた。後に傳えられる譚嗣同が袁世凱に説いて、軍隊で頤和園を包圍させようとしたことについては真相の如何を知らない。その時、私は外邊に在つて密議には與つていなかつたからである。しかし、七月に袁世凱が入京したことは確かであり、當時袁は小站に在つて軍隊訓練に當つていたのだが、光緒帝は召見後、彼に侍郎の銜を賞給したのである。

八月初、ものものしい空氣がただよつていた。丁度、日本の伊藤博文が北京滞在中で、彼は日本の知名人であつたので、私共の學堂の同學は會見を希望し、その承諾を得た。六日我々は東交民巷の日本公使館で彼と會つたが、その時はまだ政變のことを知らなかつた。伊藤は我々に「一つの國家の改革は容易なことではない。必ずや幾度かの挫折を経てはじめて成功を見るものである。愛國を志される皆さんは充分自重なさるよう」と語つた。伊藤はすでに政變を知つていたが、明言出来ないでこの様な含みのある云い方をしたのである。

私共は日本公使館から出て来て、はじめて西太后が頤和園から宮中に歸り、政變が発生したというニュースを聞いた。六日、西太后

の垂簾の詔勅が下り、八日には皆が垂簾を慶賀し、九日には康廣仁等六人が逮捕された。康有爲は政變の前にすでに消息を知り、英人T・リチャードに護送されて北京を出た。當日、南海會館は包圍されたが康有爲は逮捕出来なかつたのである。梁啓超は日本公使館に逃げ込み、日本人が彼を連れ出した。康有爲は天津到着後即ち英國船で逃れ、西太后は榮祿に命じて軍艦飛鷹で追わせたが追いつけなかつた。梁啓超は日本人に送られて塘沽から乗船したが、榮祿は王修植（字宛生、北洋候補道、北洋學堂總辦）に梁を追跡させた。

「王は頭が仲々新しく、西太后に不満をもつていた。榮祿が彼に追わせたのは梁啓超を逃がそうという底意があつたことである。榮祿は狡猾な人間で二股膏藥はお手のものだつたから」と云う人もあるが事實の程は判らない。王修植は乗船臨検したが、梁啓超はすでに辮髪を切つて日本の着物に着かえていた。王は彼を見つけたけれども口には出さず、いいかげんにお茶を濁して立去つた。後、梁は日本に亡命したのである。

逮捕された六君子は上諭によつて刑部に引渡され、嚴重に取調べの上、十三日、驛馬市大街に引出されて處刑された。楊崇伊の息子も通藝學堂の學生で、私のところへ（このことを）知らせに駆けて来たが、顔には喜色を浮べており、どんな量見でいるのやら私には解せなかつた。その時、毎日逮捕が行われ、學士徐致靖、尙書李端棻、戸部侍郎張蔭桓等が投獄された。數人が殺された後、もう殺されはしなかつたが、世上にはまだ大量に死刑になるといふデマが飛んで来た。李端棻と張蔭桓は前後して新疆に流された（充軍）が、出發の際私共は皆西郊まで送つたものだつた。李端棻は西安で病氣になり、地方官の奏請によつて暫く西安で療養した。張蔭桓は新疆

の迪化に流され軍隊の苦役に服したが、義和團の時に西太后は詔を下して彼を殺してしまつた。政變後、續々と免職されたものは數十人に上り、湖南巡撫陳寶箴、侍講學士文廷式等もその中に含まれてゐた。

その時、私はなお總理衙門におり、隔日の出勤だつた。世間には大量逮捕の噂が盛んに流れてゐたが、私は平常通り出勤して靜かに逮捕を待つた。八月二十三日、王錫蕃、李岳瑞と私とはともに懲戒免職を受けた。そこで私は通藝學堂を閉鎖し、校産を整理して京師大學堂に引渡した。

政變發生後、私は李鴻章に會ひ、彼に「現在太后と皇上と意見が會わないが、あなたは國家の重臣であるから、間に立つておとりになつてしかるべきでしよう」と云うと、彼は歎息して「お前達若僧に何が判る？」と答えたので私ももう何も云わなかつた。

私が免職されると李鴻章は于式枚に私を慰問させ、今後どうする積りかと尋ねて来た。私が上海に行つて生計の道を構じたいと答えると數日たつて于がまたやつて来て云つた。「君は先ず上海に行きなさい。李閣下はすでに盛宣懷に頼んで君のために仕事を探してもらつてゐる。」私は平素から李鴻章とは何らの因縁もなく、ただ長官―下僚の關係にあるだけであつた。しかし彼は私に特に眼をかけてくれていたようである。

私が上海に到着すると盛宣懷が訪ねて来て「李閣下から手紙で紹介をいただいたております。今あなたに南洋公學で譯書の事業をやつていただくと思つてゐます。」と云つた。私はそこで嚴復譯のアドラム・スミスの「原富」（國富論）を印刷した。半年ほど經つて公學總理何梅生が急病で亡くなり、私はその後任となつた。當時、南

洋公學の監督は米人フェルグソンであつたが、私は彼と意見が合はず、數ヶ月働めただけで辭職し、後に商務印書館に入つた。

庚子（一九〇〇）の年、義和團事變が発生した時、李鴻章は兩廣總督の任にあつた。その時に西太后は五人の大臣——兵部尚書徐元儀・吏部左侍郎許景澄・大常寺卿袁昶・戸部尚書立山・内閣學士聯元を殺した。後八國聯合軍が北京を陥れると、西太后は光緒帝と西安に避難し、一方李鴻章を北上させて和議に當らせた。李が上海を通つた際、私は彼に會いに行つてもう清朝のために盡力はしないように勧めた。彼は私に對して「君達若僧に何が判る？」と云い、また「私の老の命もまだ役に立つのだ」とも云つた。後、和議がまとまらず、彼は北上した。<sup>(6)</sup>

戊戌の年四月二十八日、康有爲と私とが光緒帝に謁見した日に、翁同龢は追放歸郷させられたが、義和團事變の時になつて西太后はまた地方官に命じて殿しい拘束を加えさせた。これは大變な侮辱であつた。翁が光緒帝の師傅であり平素帝に非常に近かつたため、西太后に憎まれていたからである。私が光緒帝に召見された後で李鴻章は私に翁同龢追放の件を知っているかどうか聞いて来た。その時私は政局に重大事態がおこることを豫感したが、李はただ歎息するばかりであつた。その頃は彼も力をもたなかつたのである。<sup>(7)</sup>

政變後、西太后は光緒帝を中南海の瀛台の中に幽閉し、帝は病氣で親政することが出来ぬと云い張つた。當時、各國の駐華公使は、皆光緒帝の變法に賛成していたので、醫者を連れて帝を見舞おうとした。そのため西太后の外國人に對する憎惡は骨髄に徹し、後に義和團の扶清滅洋の變を激成したのである。二者の間には因果關係が存在している。

當時の環境の下では戊戌變法の失敗は必然的なもので、全然、成功の可能性はなかつた。その頃は私共は變法によつて國運を挽回しようとしたのだが、後になつてやつとそれが夢想にすぎなかつたことを覺つたのだつた。（一九四九年九月二十三日、汝成・昌杭・家麟記錄）

#### 註

- (1) 強學會は一八九五年、康有爲が發起し、文廷式が表面に立つて組織され、その年の冬には禁止された。この項は張氏の記憶違いであらう。
- (2) これは中外紀聞（中外交報とも云う）の間違ひである。
- (3) 榮祿はこの時署直隸總督を拜命した。後記の翁同龢の追放とも西太后一派の反撃の布石であつた。
- (4) 原文は「大約一刻鐘光景」。康南海自編年譜では召見は數時間にわたつたとしている。
- (5) 「可是他們都不贊成呀」。彼等とは西太后一派を指しているのであらう。
- (6) 李鴻章は故意に上海に停留して情勢を觀望して、北方の和議が不調に終つて始めて自ら出馬したのである。
- (7) 實は李鴻章は變法派に對する攻撃の黒幕であり、新政反對に大いに畫策していたことを湯志鈞氏が立證している。張氏は變法派右派に屬しており、そのせいもあらうが、李の老獪さをうかがうに足る。